

II 遺 跡

1 遺跡の概要

土層 調査地は資材置場として利用されていたために厚い盛土が施されているが、以前は水田であった。水田耕土・床土下には、地山までの間に灰白色ないし灰褐色砂礫、青灰色砂質土、黄灰褐色砂質土、暗灰褐色粘質土及び暗茶褐色粘質土の大略5層の堆積がある。

最上層の砂礫は厚さ10～40cmで、調査区全体に認められた。近世における佐保川の氾濫に伴うものと考えられる。青灰色砂質土は厚さ10～20cmで、中央調査区の西半部と北西調査区に認められた近世の堆積である。黄灰褐色砂質土は厚さ20～40cmで、調査区全体に認められた。瓦器片を含み、鎌倉時代頃の堆積と考えられる。暗灰褐色粘質土は厚さ10～20cmで、中央調査区の西半部に比較的厚く、他では部分的に認められた。奈良時代の遺物包含層である。暗茶褐色粘質土は中央調査区の南西部に部分的に認められた。古墳時代の遺物包含層である。

地山 (fig. 7) 調査地の地山は大部分が黄褐色粘質土であるが、中央調査区の東辺部ではこの上にやや軟質な暗黄褐色粘質土が堆積する。黄褐色粘質土は東南部で厚さ約30cmであるが、西と北では薄く下の淡褐色粗砂が帯状にあらわれる。黄褐色粘質土は厚さ60～90cmで、厚さ約40～80cmの青灰色シルト層をへて、木葉や樹木を多量に含む黒褐色粘質土と灰色細砂の互層に至る。木葉や樹木を多量に含む層は、上面の標高が約50.7mで、奈良盆地形成以前の最終氷河期^{註1}の湖沼堆積(ミツガシワ層)と推定される。黄褐色粘質土上面の標高は、中央調査区の北東部と北東調査区とが最も高く約52.5m,中央調査区の南西部が最も低く約52.2mである。

遺構 検出した主な遺構は奈良時代と古墳時代に属し、他に中世の遺構が若干ある。奈良時代と、大部分の古墳時代の遺構は地山面で検出し、中世の遺構は黄灰褐色砂質土面で検出した。

奈良時代の遺構には掘立柱建物47棟、掘立柱塀8条、溝7条、道路2条、池状遺構1、井戸1基、土器埋納遺構3基のほかいくつかの土壌がある。これらは平城京左京八条一坊三・六坪の坪境小路、八条々間路および三・六坪々内の遺構であり、大きく4時期に区分できる。

中世の遺構には三・六坪の坪境を南流する幅約22mの河川1条がある。他に中世末ないし近世に属する井戸、土壌及び溝があるが、まとまりに欠ける。

古墳時代の遺構には掘立柱建物35棟以上、竪穴住居跡3棟、掘立柱塀6条、河川1条、溝10条のほかいくつかの土壌がある。5世紀末から6世紀前半代を中心として形成された集落で、ほぼ4時期に区分できる。

なお、各遺構には奈良国立文化財研究所が実施している平城京左京の調査基準に従って一連

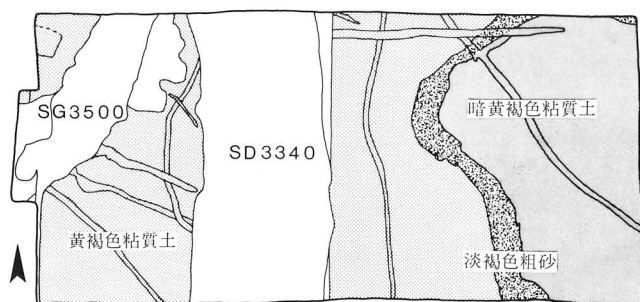


fig. 7 中央調査区地山

の番号と、遺構の種類を標示する記号、例えば建物—SB、築地・塀—SA、溝—SD、園池—SG、道路—SF、広場—SH、井戸—SE、土壌—SKの記号を付した。

註1 この層は西方約450mの地点でも検出している。奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪』1984

2 奈良時代の遺構

A 条坊遺構 (PL.15、巻末折込)

今回の調査では平城京の条坊に関連する遺構として、八条々間路1条、八条々間路に平行する堀1条、三・六坪の坪境小路の東側溝1条、坪境小路に面する門1棟を検出した。以下、それぞれの遺構の概要を述べる。

SD772・773、SF796 八条々間路を確認すべく設けた北東調査区で検出した2条の平行する東西溝と、その間にある道路の路面である (fig. 8)。SD773は南溝で、幅が1.5m、深さが0.3mである。溝の堆積土は一様に暗灰褐色粘質土で、ここから奈良時代後半の土器が出土した。一方、SD772は北溝で、幅が2.7m、深さが0.6mである。溝の底には灰色粘質土が約10cmの厚さで堆積し、その上を黄灰色及び茶褐色砂質土が覆う。土器片を包含するものの、いずれも小片であり、胎土から奈良時代の土器であることが知られるにとどまる。両溝の間には顕著な遺構はなく、中央部がやや高く、両端が溝に向かって低くなる。幅は約7.3mである。これらの遺構は、両溝が心心距離で約9.7m隔たっており、条間路の幅員として適当であること、両溝間に遺構がないこと、条間路想定位置であることなどから、八条々間路の路面とその両側溝と考えることができる。

SA3535 八条々間路南側溝SD773の南に、東西に並ぶ2個所の柱穴である。掘形は大きさが一辺0.6m程で、深さ約0.2mとかなり削平されている。柱間寸法は約1.8mで、SD773の南肩から柱筋の心までは1.3mである。発掘範囲が狭く、断定はできないが、六坪の北を画す板塀であるか、あるいは築地に開く掘立柱の門であろう。

SD3333 中央調査区のはぼ中央部に位置する素掘りの南北溝で、延長37mにわたって確認した。溝の西肩はほとんど残っていないが、比較的破壊の及んでいない調査区北端で復原すると、幅約1.8mとなる。深さは約0.4mである。溝の埋土は、上から黄茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土、暗灰色粘質土の3層で、溝が順次埋没していった様相を呈する。奈良時代中頃の軒瓦を包含することや、その位置・規模などから三坪と六坪の境をなす小路の東側溝と推定できる。

SB3320 三・六坪の坪境小路SD3333の東に沿って2個所の柱穴が南北に並ぶ。掘形はともに一辺30~40cm、深さ約0.4mと小さいが、北の柱穴には径約15cmの柱根が残る。柱根は検出時、北西方向に傾いていた。柱間寸法は約2.2m (7.5尺) であり、SD3333の東肩から柱筋までは約0.7mと近接する。六坪を南北にはぼ三分する位置にあり、小路に開く門である可能性が高い。これを門とすると小路に沿う築地もしくは塀が必要となる。門の延長上には柱穴が残存しないので掘立柱を伴う板塀等は想定しにくい。築地の積土等は残存しないが、小規模な築地がこの門に取り付いていたのであろう。

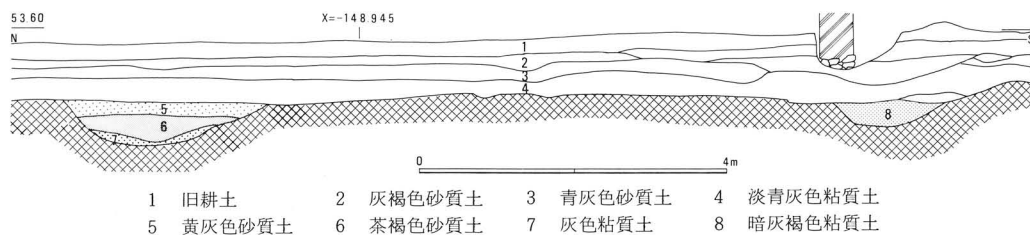


fig. 8 八条々間路土層図 1 : 100

B 三坪の遺構 (fig.10、PL.4・7・10、巻末折込)

主な遺構には掘立柱建物19棟、掘立柱塀2条、池状遺構1、土器埋納遺構3基がある。

建物・塀・溝 (fig. 9) 中央調査区の西半部、後述する池状遺構SG3500の東岸で建物14棟、北西調査区で建物5棟、塀2条、溝2条を検出。三坪の東辺には中世河川SD3340があり、北西調査区も面積が狭いため、部分的な検出に終わったものもある。建物規模は概して小さい。

SB3350 (PL. 9) 中央調査区の南西部で検出した桁行3間以上、梁間2間の東片廂付南北棟。柱間寸法は桁行2間分3.8m、1.9m等間。身舎梁間3.4m、廂の出2.4m。方位は国土方眼方位 (以下「方眼」と略記)にはほぼ一致。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形を呈するが、西側柱筋の北から3番目(「北3」と略記、以下同様)の柱穴は検出されなかった。東側柱北2・3、入側柱筋北1・2・3、西側柱筋北1の掘形に、径約20cmの柱痕跡を留める。東入側柱筋がSB3410の東側柱筋と一致し、東側柱筋がSB3445の東側柱筋とほぼ揃う。

SB3360 中央調査区の南西部で検出した桁行2間以上、梁間2間の南北棟。寸法は桁行1間が2.0m、梁間4.8mである。方位はほぼ方眼。柱掘形は径約0.5mの不整形円形を呈する。

SB3401 (PL. 9) 中央調査区の南西部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。寸法は桁行総長5.9m、柱間1.96m等間、梁間3.5m、方位はほぼ方眼にあう。柱掘形は一辺約0.5mの隅丸方形、ないしは長円形を呈し、北妻柱および西側柱北1・2・4の掘形に径約20cmの柱痕跡を留める。SB3415の柱掘形と重複しており、それより新しいことを知る。

SB3405 (PL. 9) 中央調査区の南西部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位は北でやや東に振る。寸法は桁行総長5.7m、柱間1.9m等間、梁間3.5m。西側柱筋北2と南妻柱の柱穴は検出されなかった。掘形の大きさは径0.4m前後の不整形で一定せず、東側柱筋北2・3の掘形には径約15cmの柱痕跡を留める。西側柱筋北3の柱穴から8世紀後半頃の須恵器杯蓋が出土した。

SB3410 (PL. 9) 中央調査区の南西部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。寸法は桁行総長5.6m、柱間は中央間2.0m、両脇間1.8mと、中央間がやや広い。梁間3.6m。柱掘形は一辺0.4~0.7mの隅丸方形で、西側柱全部と東側柱北1・2・4及び北妻柱の掘形に径約20cmの柱痕跡を留める。方位はほぼ方眼。

SB3415 中央調査区の西辺中央部で検出した桁行3間以上、梁間2間の東西棟。方位はほぼ方眼。寸法は桁行2間分3.8m、柱間1.9m等間、梁間3.4m。柱掘形は一辺0.5~0.9mの隅丸方形で、西南隅の掘形に柱痕跡を留める。SB3401より古く、東半はSD3340によって失われている。

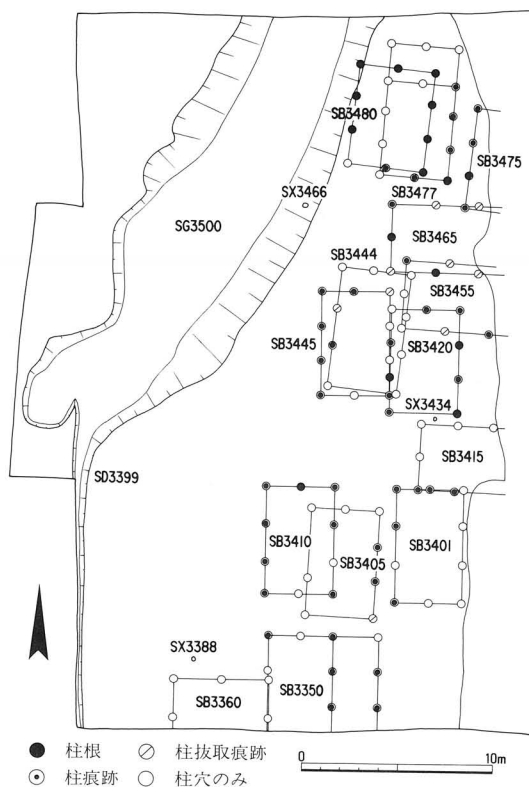


fig. 9 三坪遺構模式図 1 : 400

S B3420 (PL. 9) 中央調査区の西辺中央部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位はほぼ方眼。寸法は桁行総長5.4m、柱間1.8m等間、梁間3.6mで、すべての柱間を6尺で計画したと考えられる。柱掘形は一辺約0.5mの略方形を呈し、西北隅をのぞいたすべての掘形には径約20cmの柱痕跡が、東側柱筋北2・4と、西側柱筋北3の掘形には柱根が残る。柱根の残存径は10~15cmである。S B3444・3445・3455の3棟の建物と重複しており、柱掘形の重複からS B3445より古いことを知る。西側柱筋はS B3350の東側柱筋及びS B3465の西妻柱筋と一致する。東南隅の柱掘形から8世紀後半の須恵器杯蓋が出土した。

S B3444 (PL. 9) 中央調査区の西辺中央部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位は北で東に振っており、S B3455よりやや振れが強い。寸法は桁行総長6.3m、柱間2.1m等間で各7尺と推定される。梁間は3.6mであるが、南妻の柱穴は検出されなかった。東側柱筋から1.3mをおいて、各柱にはほぼ対応する位置に径30cmほどの小さな柱掘形が4つあり、北1に径約10cmの柱根を留める。簡単な廂ないしは軒支柱が付されていたと考えられる。柱掘形は、東側柱筋が不整形で径0.7m前後、西側柱筋はやや小さめの略方形である。S B3420・3445・3465と重複しており、掘形の重複からS B3445・3455より新しいことを知る。

S B3445 (PL. 9) 中央調査区の西辺中央部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位はほぼ方眼。寸法は桁行総長5.4m、柱間1.8m等間、梁間3.6mで、すべての柱間を6尺で計画したと考えられる。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形を呈するものが多いが、北妻は特に小さい。西側柱筋すべてと、北妻と東南隅の掘形に径20~30cmの柱痕跡を留め、東側柱筋北3には径約15cmの柱根が残る。S B3420・3444と重複しており、S B3420より新しいことを知る。

S B3455 (PL. 8) 中央調査区の西辺中央部で検出した桁行3間以上、梁間2間の東西棟。方位は東でやや南に振れ、S B3477とほぼ等しい。寸法は桁行2間分4.6m、梁間3.6mで、柱間は桁行を長く取る。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形を基本とする。S B3420・3444・3465と重複するが、柱掘形はS B3444とのみ重複し、それより古いことを知る。

S B3465 (PL. 8) 中央調査区の西辺中央部で検出した桁行3間以上、梁間2間の東西棟。方位はほぼ方眼に一致する。寸法は桁行2間分4.6m、梁間3.6mである。柱掘形は西妻柱筋と北側柱筋西2が一辺約0.6mの略方形で一致するが、南側柱筋の掘形は特に小さい。西妻柱筋には、径約20cmの柱痕跡があり、径約12cmの柱根が遺存する。S B3444・3455・3475と重複するが、柱掘形の重複は見られない。東半はS D3340により失われている。

S B3475 中央調査区の北西部で検出した桁行3間の南北棟。東半はS D3340によって失われ、梁間の規模は不明。寸法は桁行総長5.4m、柱間1.8m等間、6尺で計画されたと考えられる。方位は北で東へ振れ、振れはS B3477よりやや強く、S B3480と一致する。柱掘形は一辺約0.4mの隅丸方形で、南と北の隅をのぞいた西側柱筋の掘形に径約15cmの柱痕跡を留める。

S B3477 (PL. 8) 中央調査区の北西部で検出した桁行3間、梁間2間の北片廂付南北棟。方位は北でやや東に振れ、S B3455と一致する。寸法は身舎桁行総長5.1m、柱間3間等間、廂1.9m、梁間3.5mである。柱掘形は一辺約0.6mの略方形で、東南隅の柱掘形には径約25cmの柱痕跡があり、径10cmほどの柱根が遺存する。その他の東側柱筋と南妻柱の掘形には、径約20cmの柱痕跡を留める。S B3480と重複しそれより古い。

S B3480 (PL. 8) 中央調査区の北西部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位は

北で東に振れ、S B3444・3475と一致する。寸法は桁行総長5.4m、柱間1.8m等間、梁間3.9m。南妻柱と西側柱筋北4をのぞく8つの柱掘形に柱根が遺存する。最大残存径約20cm。S B3477と重複し、それより新しい。側柱の掘形から奈良時代中頃～後半の須恵器杯蓋が出土した。

S B3501 北西調査区で検出した桁行2間以上、梁間2間の南北棟総柱建物。寸法は桁行1間1.6m、梁間3.0m。柱掘形は径約0.4mの不整円形で、西側柱筋北1・2、棟通り北2の柱掘形に径約15cmの柱痕跡を留める。S B3505・3511と重複し、S B3511より新しい。

S B3505 北西調査区で検出した桁行3間、梁間2間以上の東西棟。寸法は桁行総長6.2m、柱間は2.1m前後で出入りがある。梁間1間分1.5m。西1間分を仕切っている。柱掘形は長径が0.3m前後の不整楕円形で、北側柱筋西1・2・4の間仕切の掘形に径約10cmの柱痕跡を留める。S B3501・3506・3511等と重複するが、柱掘形の重複はない。

S B3506 北西調査区で検出。ほぼ方眼方位に東西に並ぶ2つの柱掘形で、南北棟の一部と推定した。柱間(梁間)は3.6mで、12尺で計画された可能性がある。柱掘形は長辺約0.5mの長方形を呈し、東の掘形には径約10cmの柱痕跡を留める。

S A3508 北西調査区で検出。ほぼ方眼方位に南北に並ぶ2つの柱掘形で、柱間寸法2.4m、8尺で計画した塀の一部と推定した。柱掘形は一辺約0.7mの隅丸方形で、径約30cmの柱痕跡を留める。掘形の形状から察して、大規模な建物の一部となる可能性もあり得る。

S A3510 北西調査区で3間分を検出した東西塀。柱間寸法はほぼ1.9m等間である。柱掘形は一辺約0.5mの長方形を呈する。この南に平行する溝S D3520が、L字形に北へ折れる所で終わり、以東へは伸びないので、S D3520と関連するものと考えられる。東端を妻とする東西棟の南側柱筋となる可能性もあり得よう。

S B3511 北西調査区で検出。調査区のほぼ中央に3つの柱掘形があり、南北棟の南の妻柱筋と推定した。柱間寸法はほぼ2.4m等間である。方位は東でやや北に振れる。S B3501と柱掘形が重複しており、それより古いことを知る。

S B3515 北西調査区で検出。南北棟の南妻柱筋の一部と推定した。柱間寸法は2.1m、柱掘形は径約0.3mで、西の掘形には径約15cmの柱痕跡を留める。方位は北で西に振れる。

S D3520 北西調査区で検出したL字形の溝。幅約0.3m、深さ約0.2m。埋土から8世紀前半～中頃の土器が出土した。S D3523より新しく、またS A3510と関連すると考えられる。

S D3523 北西調査区で検出した南北溝。幅約0.9m、深さ約0.3m。埋土から土師器と瓦の小片が出土した。S B3506、S A3508、S D3520のいずれよりも古い。

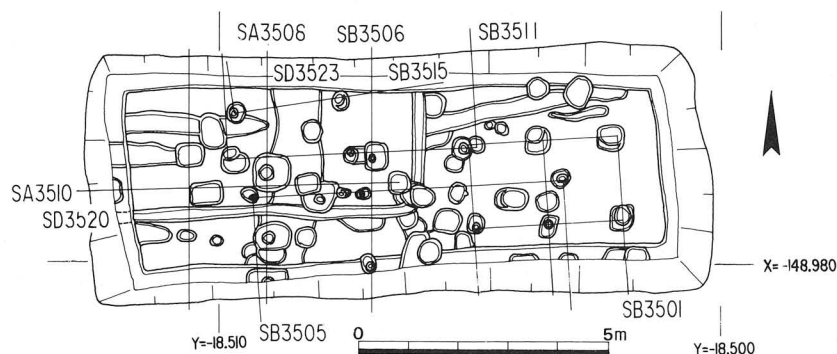


fig.10 北西調査区遺構図 1 : 150

池状遺構 (PL.16) 中央調査区の北西部で池状の遺構 S G 3500 (以下「池」と呼ぶ)と、その南端部に取り付く南北溝 S D 3399を検出した。

SG3500 下層に古墳時代の河川があり、この流路がかなり埋った段階で平城京の宅地内部にとり込まれたものである。その幅や形態も旧河川を継承していることから一定せず、上幅は5～9 m、池底の幅も4～6 mと場所によって異なる。池底は南へ行くに従って浅くなり、発掘区西辺で立ち上がる。深さは調査区北辺で約1.7 m、南辺で0.5～0.6 m。

池の堆積は3層に大別できる (fig.11)。下層は黒褐色粘質土で、北辺部で厚さが約1.0 mある。遺物は奈良時代前半の土器と瓦が少量出土した。また、ここからはウシ・ウマの骨が数点出土した。この時期にはすでに池は半ばまで埋り、東側がやや深い状態になる。この堆積土の上面、ほぼ池の中央部には細い杭 S X 3481が南北に立ち並ぶ。西岸の土留め杭であろう。中層は暗灰色及び暗褐色粘質土で炭を比較的多く含む。東岸で厚く約0.5 mある。中層の主として東岸からは奈良時代中頃から後半の土器と瓦が多量に出土した。この時期には池はほとんど埋没し、中央部が浅く窪んだ状態となる。上層は暗褐色粘質土で、中央部で厚さ約0.5 mである。遺物はそれほど多くないが奈良時代後半の土器と瓦を含み、奈良時代末頃には池が完全に埋没したことが推測される。なお、中・上層からはモモの種が7点出土した。

SD3399 約16 mまで確認した。西肩が発掘区外に及んでおり、池との取り付け部のみ完掘した。取り付け部での幅は約1.0 m、深さ約0.4 m、南へ直線的に流下しており、池のオーバーフローの処理、あるいはここから更に別の池等に水を導くための溝と考える。なお、取り付け部の溝底近くで柱穴1個と、根を張ったままの「ムクロジ」一本を検出した (PL.16)。

京内の坪内部にあるこのような池の性格はいかなるものであろうか。ある時期に護岸の杭が打ち込まれていたり、また池尻に人為的な溝が取り付けくなど、池水が管理されていたことは明らかであり、京造営以前の小河川がただ単に坪内部に残存していたとは考え難い。一つの想定としては S G 3500が宅地内の庭園を構成する池そのものと考えられなくもないが、護岸施設である州浜石敷や景石が全く見られないことや、旧河川そのままの平面形であるなどの問題が残る。池そのものではなく、池への導水路、あるいはその末端部の滞水池と考えるのが妥当であろう。 S G 3500が三坪の中央部やや東寄りに位置することから、 S D 3399の南方、もしくは S G 3500の西方に本来の庭園を想定することができよう。

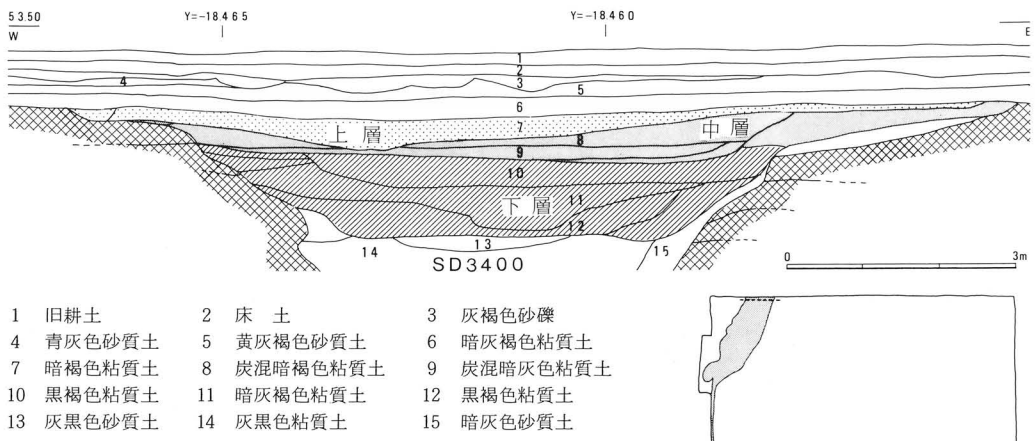


fig.11 S G 3500土層図 1 : 100

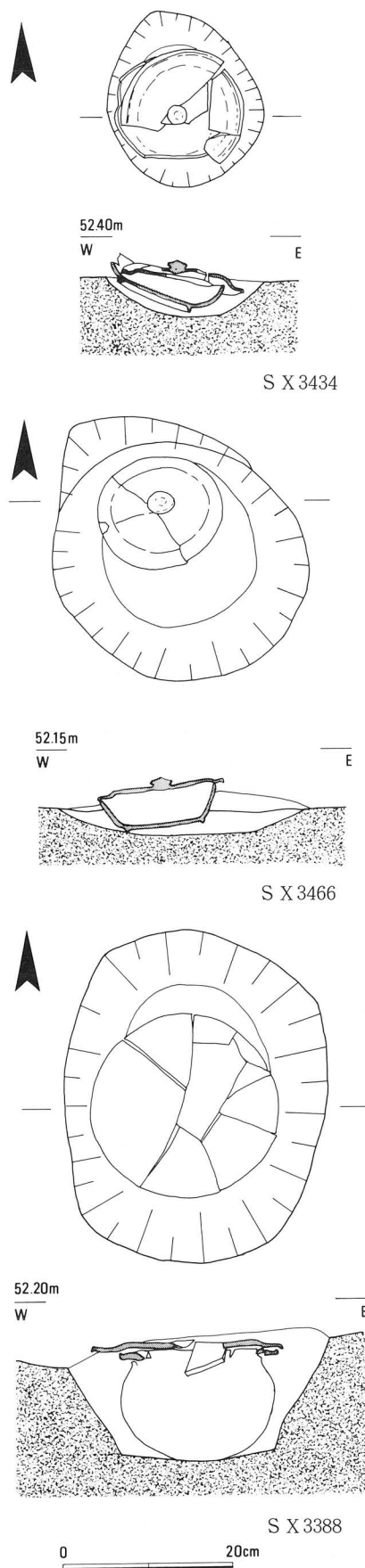


fig.12 土器埋納遺構図 1 : 8

土器埋納遺構（巻首図版、fig.12・13、PL.18） 三坪地内において、土器の埋納遺構を3箇所検出した。以下にその概要を記すが、遺構面を幾分割り込んで検出したので、各遺構の上縁の規模と深さの数値は若干大きくなる。土器の年代はいずれも奈良時代後半に比定できる。

S X 3388 中央調査区南西部で検出。地山面に楕円形（東西約30cm、南北約40cm、深さ約15cm）の穴を掘り、蓋をした甕を穴底に据えている。穴底は平坦で楕円形（東西18cm、南北25cm）である。埋土中からの出土遺物は他にない。甕は土師器甕A、蓋は須恵器皿A蓋。蓋は破損しており、甕内には土が充満していた。この土の分析を試みたが、内容物は検出されなかった。

S X 3434 S X 3388の北東約18mで検出。地山面に不整形円形（直径約20cm、深さ約5cm）の穴を掘り、蓋をした杯を納めている。穴底が舟底形のためか、土器は若干傾斜している。杯・蓋は須恵器杯Fの身と蓋である。杯に充満した土から内容物は検出されなかった。

S X 3466 S G 3500の東岸斜面、炭混り暗褐色粘質土上面に円形（直径約30cm、深さ約5.50）の穴を掘り、蓋をした杯を納めている。穴の底は円形（直径約18cm）ではほぼ平坦であるが、土器は傾斜している。杯・蓋はS X 3434と同じ須恵器杯Fの身と蓋である。杯の底部には「神功開寶」銭が1枚納められていた。

これらの遺構のうちS X 3388・3434は掘立柱建物群内で検出され、その埋納行為が掘立柱建物との関連で理解されるべきものと思われる。S X 3466はS G 3500の東岸斜面で検出したものであり、建物群よりもむしろ水に関連する埋納行為と考えるのが適当であろう。

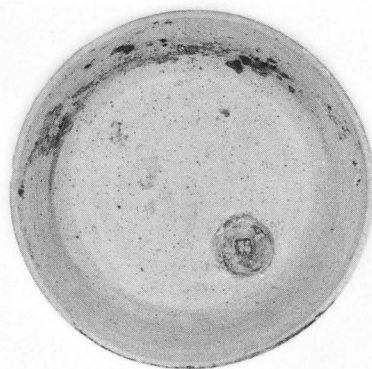


fig.13 S X 3466杯内底銭附着状況

C 六坪の遺構 (fig.15・60、PL.5・6・11)

主な遺構は掘立柱建物28棟、掘立柱塀6条、井戸1基で、他にいくつかの土壇と溝がある。
建物・塀・溝 (fig.14) 主要なものは中央調査区の東半部で検出した。北東調査区でも若干の建物を検出したが、発掘面積が狭く、規模などは明らかにできなかった。

SB3170 中央調査区の東南隅で検出した東西に並ぶ3つの柱掘形で、南北棟の北妻と推定した。柱間は約2.1m、柱掘形は一辺0.5m。SB3180の柱掘形と重複し、それより新しい。

SB3175 中央調査区の東南部で検出した桁行5間以上、梁間2間の南北棟。方位は北で方眼よりやや東に振る。寸法は桁行4間分7.7m、柱間は北から3間目が2.1m、他は1.8~1.9m。梁間は北妻柱筋で3.4mあるが、南でややせまい。柱掘形は一辺約0.5mの略方形を基本とするが、北妻柱は小さく、北4もきわめて浅い。SB3180・3190・3200と重複する。

SB3180 (PL.12) 中央調査区の東南部で検出した桁行6間、梁間2間以上の東西棟。方位は東でわずかに南に振る。寸法は桁行総長10.6m、柱間1.8m等間、梁間1間分1.8mであり、6尺等間の計画と考えられる。柱掘形は一辺約0.5mの隅丸方形を基本とし、側柱筋東1・4・5及び東妻柱の各掘形には抜取穴がある。SB3170・3190と重複し、SB3190より古い。北側柱筋西3の柱穴から8世紀中頃の土師器が出土した。

SB3185 中央調査区の東南部で検出した桁行2間以上、梁間2間の南北棟。寸法は桁行1間分1.7m、梁間3.4mで、柱間は等間。方位はほぼ方眼。柱掘形は径約0.3mの不整形円形。

SB3190 (PL.12) 中央調査区の東南部で検出した桁行6間以上、梁間2間の南片廂付東西棟。寸法は桁行5間分11.8m、柱間約2.4m、梁間4.8m、廂2.7m。身舎は8尺等間、廂の

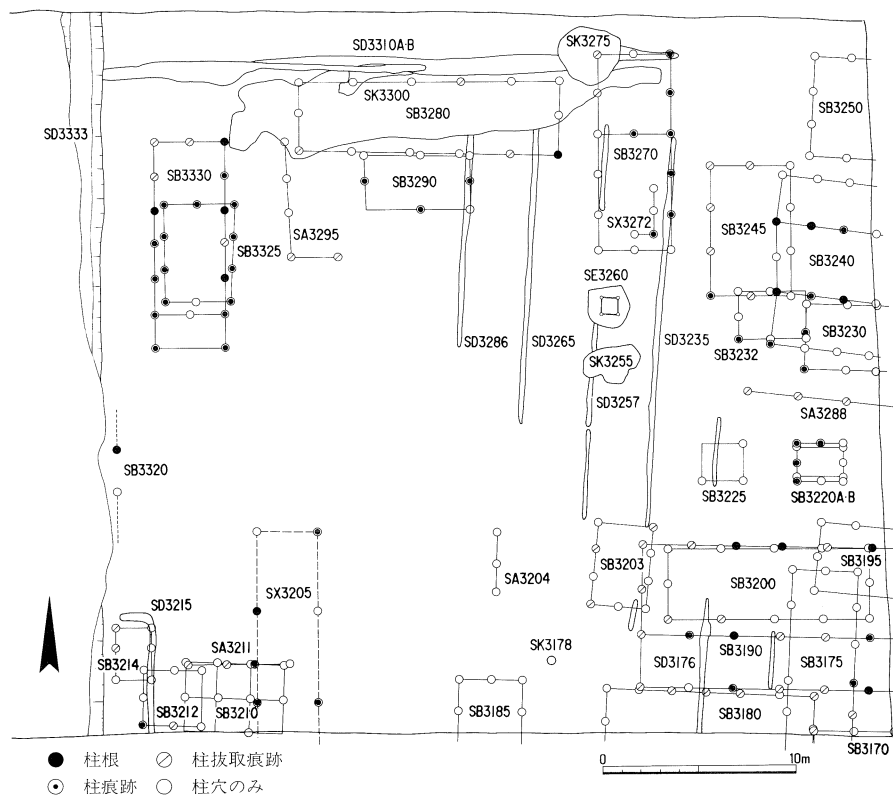


fig.14 六坪遺構模式図 1 : 400

出は9尺の計画と考えられる。方位は東で方眼より南に振る。柱掘形は一辺約0.6mの略方形で、北側柱西3・4・6、南入側柱西3、南側柱西6に径約20cmの柱根が遺存。S B3180・3200・3203と重複し、S B3203より古く、S B3180・3200より新しいことを知る。身舎南側柱の掘形から8世紀後半の土器と軒平瓦6681E、身舎南西隅の柱抜取穴から曲物の漆容器が出土。

S B3195 中央調査区の東南部で検出した桁行2間以上、梁間2間の東西棟。寸法は桁行1間分1.8m、梁間3.6m。柱掘形は径約0.2mの略円形で、方位は西で方眼より北に振る。

S B3200 (PL.12) 中央調査区の東南部で検出した桁行4間、梁間2間の東西棟。方位はほぼ方眼。寸法は桁行総長10.4m、柱間は東2間が約2.4m、西2間が約2.8m。梁間3.8m。桁行4間と偶数間になること、S B3190がこれの建て替えと見られ、かつ桁行5間以上となることを考え合わせると、東妻柱が間仕切で、建物が東へ延びる可能性もある。柱掘形は一辺0.7m前後の略方形を基本とする。S B3175・3190・3195と重複し、S B3190より古い。

S B3202 (PL.12) 中央調査区の東南部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位は北で方眼よりやや東に振る。寸法は桁行総長4.3m、梁間3.0m。S B3190・3200より新しい。

S A3204 S A3203の西約5mで検出した南北2間の塀。柱間寸法はほぼ1.6m等間。方位は北でやや東に振る。S B3203と同方位に振れることから、それに伴うものと考えられる。

S X3205 中央調査区の中央南辺で検出した矩形に結ばれる6個の柱掘形。規模は南北を長辺として北側4.3m、南側4.8m、短辺は3.0mである。西側中央の柱掘形には径約20cmの柱痕跡を留め、径約10cmの柱根が遺存している。通有の建物の遺構とは考え難く、隅などの要所に深い掘立柱を用いた柵状の施設と推定される。北半4つの柱掘形は各2個の重複があり、また南へ伸びる可能性もある。南西の柱掘形はS B3210と重複しており、それより古いことを知る。

S B3210 中央調査区の中央南辺で検出した桁行3間、梁間2間以上の東西棟総柱建物。寸法は桁行総長5.1m、柱間1.7m等間。梁間1間分も1.7mである。方位はほぼ方眼にあう。

S A3211 S B3210の北側柱筋の掘形と重複し、それより新しい東西三間の塀。掘形は不整形で、西1・2には抜取穴を、また西3には径約20cmの柱痕跡を留める。方位はほぼ方眼。

S B3212 中央調査区の中央南辺で検出した桁行2間、梁間2間の東西棟。寸法は桁行の西が広く1.7m、東は1.4m。梁間2.8m。方位は東で方眼よりやや南に振る。柱掘形は、径約0.2mの略円形。S B3210・3214と重複するが、柱掘形の重複はない。

S B3214 中央調査区の中央南辺で検出した桁行2間、梁間1間の南北棟。桁行総長2.8m、梁間1.9m。方位は方眼よりやや東に振る。

S D3215 S B3214の東側柱筋と重複し、それより新しいL字形の溝。S B3214のやや北で西に折れて約1.5m続く。幅は約0.3mあり、埋土から8世紀の土器小片が出土した。

S B3220A・B 中央調査区の東辺で検出した同位置にほぼ同規模で建てかえた建物。Aは桁行・梁間共に1間、Bはそれを各2間に改める。寸法はAの桁行が2.5m、Bはそれをやや狭め、梁間はAが1.6m、Bは2.1mに広げる。柱掘形はいずれも径0.4m前後の不整形円形で、Bの西北4個の掘形には径15~20cmの柱痕跡を留める。方位はAがほぼ方眼、Bは東でやや南に振る。方位や配置から、AはS B3200の、BはS B3190の付属屋に比定されよう。

S B3225 S B3220の西2.7mで検出した桁行1間、梁間1間の東西棟。寸法は桁行・梁間共に約2.0m。S B3220と東西に並び、ほぼ同規模であるので、対になる建物と考えられる。

SA3228 中央調査区の東辺で検出した東西2間の塀。柱間寸法は2.7m前後、柱掘形の大きさは一定せず、すべてに抜取穴がある。北方SA3240と同方位で、その南を画す塀と考えられる。したがってSB3240と同様、さらに東へ伸びる可能性が大きい。

SB3230 中央調査区の東辺で検出した桁行2間以上、梁間2間の東西棟。方位はほぼ方眼。寸法は桁行1間分約1.9m、梁間は3.6mであり、柱間6尺等間の可能性がある。西南隅柱と西妻柱の掘形は一辺約0.5mの方形で、径約20cmの柱痕跡を留める。SB3240より古い。

SB3232 中央調査区の東辺で検出した桁行2間、梁間2間の東西棟。方位はほぼ方眼。寸法は桁行3.4m、1.7m等間、梁間2.5m。東北隅及び東妻の柱掘形は検出されなかった。西南隅の柱掘形には径約10cmの柱痕跡を留める。SB3230より新しく、SB3240より古い。

SB3240 (PL.12) 中央調査区の東辺で検出した桁行3間以上、梁間2間の南北2面廂付東西棟。寸法は桁行2間分3.6m、身舎梁間3.6m、北廂2.4m、南廂2.7m。北入側柱西1・2、南入側柱西1・3の掘形には、最大径約20cmの柱根が残存しており、特に身舎北西・南西両隅の掘形は長方形で、0.5×0.9mと大きく、身舎の他の掘形もこれに準ずる。妻柱及び廂の掘形はかなり小さい。身舎と廂の柱位置はよく揃うが、残存する柱根から柱筋を結ぶと身舎はゆがんだ平面となり、高い精度で計画されたものとは言い難い。SB3230・3245と重複しており、SB3230よりは新しい。桁行の柱筋を建物の方位とすると、東で方眼より南に振れる。

SB3245 (PL.12) 中央調査区の北東部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位は方眼より北で東にやや振る。寸法は桁行総長6.9m、柱間2.3m等間、梁間4.2m。柱掘形は一辺約0.6mの方形を基本とするが、東側柱中央間の掘形は南北に長く約1.4m。南東隅と南西隅の柱掘形には径約20cmの柱痕跡を留め、西側柱北1・2・3の柱掘形には抜取穴がある。

SB3250 (PL.13) 中央調査区の北東部で検出した桁行3間、梁間2間以上の南北棟。寸法は桁行総長5.4m、柱間1.8m等間、梁間も1間分で約1.9mであり、柱間は6尺等間の可能性がある。方位は方眼より北で東にやや振る。

SB3270 (PL.13) 中央調査区の北東部で検出した桁行5間、梁間2間の南北棟。北2間分を仕切っている。方位は方眼方位。寸法は桁行総長10.5m、柱間2.1m等間、梁間3.9mで、柱間は桁行7尺、梁間6.5尺で計画されたと考えられる。東側柱筋の掘形は径0.4m前後で、南端をのぞいた5つの掘形に径約15cmの柱痕跡を留める。西側柱筋北3の柱穴から奈良時代後半～末頃の土師器が出土した。

SX3272 SB3270の内部の4つの柱掘形で、柱筋に沿って、東西1間、南北2間のL字形に並び、SB3270の内側に幅約90cmの区画をつくる。建物内部の棚状の施設と推定される。

SB3280 (PL.14) 中央調査区の中央北辺で検出した桁行5間、梁間2間の東西棟。寸法は桁行総長13.5m、柱間2.7m等間。梁間は3.6m前後だが、東が広い。柱掘形は一辺約0.8mの隅丸方形で、東南隅の掘形には径約10cmの柱根が遺存する。大土壙SK3300より新しい。

SB3290 (PL.14) SB3280の南で検出した桁行2間、梁間2間の東西棟。寸法は桁行総長5.4m、柱間2.7m等間、梁間2.9m。方位は東で北にやや振る。柱掘形は一定せず、両妻柱と南側柱筋東2の掘形に径約20cmの柱痕跡を留める。SB3280より新しい。

SA3295 (PL.14) 中央調査区の中央北辺部で検出した南北3間、南端から東に折れて1間の塀。南北部分の総長は6.0m、東西部分は2.4mである。方位は南北部分が北で西に振れる。

S B3290に伴うものと考えられる。

SD3310A・B S B3280の北で検出した東西溝。S D3310Aは、東はS K3275付近まで検出され、西はS D3310Bに改修される。幅約1.0m、深さ約0.2m。S D3310BはS K3275の西約7mの地点から検出され、坪境小路側溝S D3333に流れ込む。幅約0.8m、深さ約0.2m。S D3310Aは重複する遺構S B3270・3280、S K3275のいずれよりも古く、S K3300より新しい。S D3310Aの埋土から奈良時代中頃の土器が、またS D3310Bの埋土からは8世紀末頃の土器がそれぞれ出土した。坪の想定南北2等分線から南約3mの距離にあり、坪内小路の南側溝となる可能性を持つ。

SB3325 (PL.14) 中央調査区の中央北辺部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位は方眼より北でわずかに西に振る。寸法は桁行総長5.1m、柱間1.7m等間。梁間は約3.6mであるが、北が広い。柱掘形は一辺約0.4mの略方形を基本とし、南妻柱をのぞいたすべての掘形に径15~20cmの柱痕跡を留める。S B3330と重複し、掘形の重複からそれより新しいことを知る。東南隅の柱穴から8世紀後半の土師器が出土した。

SB3330 (PL.14) 中央調査区の中央北辺部で検出した桁行5間、梁間2間の南片廂付南北棟。北2間分を仕切り、廂は妻柱に対応する位置に柱掘形なく、2間分持ち放している。寸法は身舎桁行総長9.0m、柱間1.8m等間、梁間3.6m、廂の出1.8m。柱間は6尺等間。方位はほぼ方眼。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形で、東西両側柱筋のすべての柱掘形に、径20~25cmの柱痕跡ないしは抜取穴を伴う。なかに柱根の残欠とみられるものを含む。北側柱筋東3の柱穴から奈良時代中頃から後半の須恵器杯蓋が出土した。

SD3172・3226・3235・3257・3265・3286 中央調査区の東辺部で検出。東はS B3190の西4の廂柱筋の位置から、西はS B3290の東妻の位置にまでわたって、ほぼ等間隔で検出された6条の南北溝。三坪の発掘区西端でも、これに類する可能性のある溝が見られるので、付近一帯に広く分布していると考えられる。幅約0.2m前後、深さ約0.1m。心々距離は3.4~3.5mとほぼ一定で、方向は北で方眼より東に振れる。重複する奈良時代の遺構より総じて古く、古墳時代の溝S D3222よりは新しいので、7世紀から条坊施行直前までに位置付けられるが、その性格は明らかでない。

SB3525 北東調査区で検出。L字形に並ぶ3つの柱掘形を、建物の東北隅部分と推定した。方位はほぼ方眼に揃い、柱間寸法は東西が約1.8m、南北が約2.1mである。

SB3528 北東調査区で検出。発掘区内の2つ及び東壁の一つの計3つの柱掘形をとり、建物の西北隅部分と推定した。方位は北で西に大きく振る。柱間寸法は南北が2.7m、東西が2.2m。

なお、北東調査区の東西両壁沿いに各々等間隔で並ぶ3つの柱掘形がある。それぞれ東西棟の妻部分となる可能性がある。

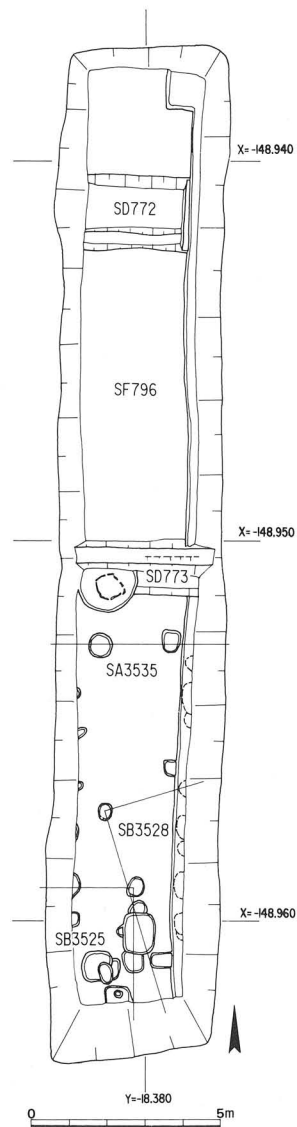


fig.15 北東調査区遺構図
1 : 200

井戸・土壇 中央調査区の東半部、六坪内で井戸1基と、若干の土壇を検出した。

S E 3260 (巻首図版、fig.16~18、PL.17) 中央調査区の東辺中央で検出した奈良時代の井戸。掘形は平面形が一辺約2.2mの不整形を呈し、深さ2.2mで湧水層の暗灰色砂層に達する。

井戸枠は、相接する二面に溝を掘った支柱を四隅に立て、両端を削って薄くした枠板を落とし込んで組み上げる。一辺0.9mの正方形で、枠板は7段目まで遺存していたが、本来は更に3段以上あったと推測される。隅柱の溝は底面から10cmの高さで止め、他方、最下段の枠板の下辺両端にはそれに対応する切り欠きを施して、枠板の脱落を防ぐと同時に枠の下に間隙ができるのを防いでいる。隅柱は12~15cm角の心去り材で、高さ1.8~1.9m残る。隅柱側面下端と底面には枠板を落とし込む溝の幅と下端の高さを野書きした墨線が残っていた。枠板は板目材と柾目材が相半ばし、平均で83×25×5cmをはかる。隅柱・枠板ともヒノキ材。

井戸内の施設として、井戸底から約25cmの高さに敷かれた網代を検出した。幅3cm前後のヒノキの薄板を「三本超え三本潜り一本送り」に編んだものであり、井戸枠の大きさに折り畳んで置き、周囲に石を置いて浮遊を防いでいる。底の砂が舞いあがるのを防ぐ施設であろう。

井戸埋土から瓦・土器・斎串・櫛・桃核等が出土した。土器は網代の下層から平城宮Ⅱの土師器・須恵器、上層から奈良時代末頃の土師器・須恵器が出土した。各々1点の墨書土器を含

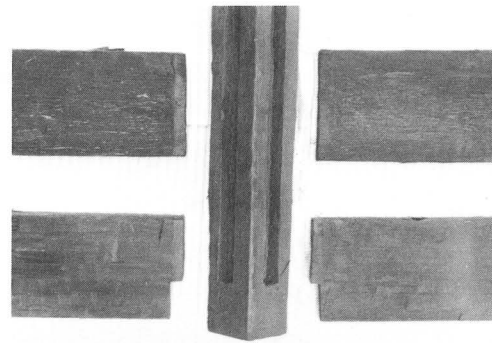
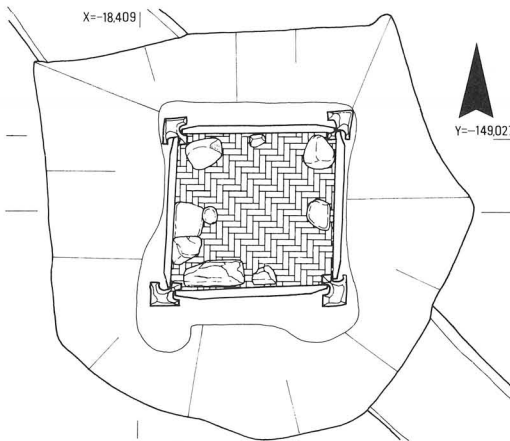


fig.17 S E 3260井戸枠細部

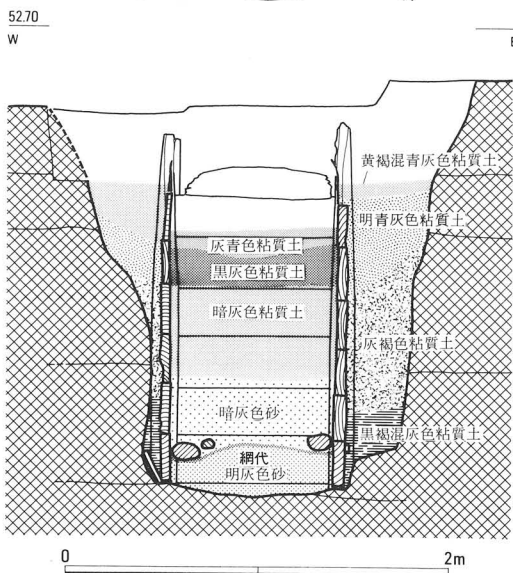


fig.16 S E 3260平面・断面図 1 : 40

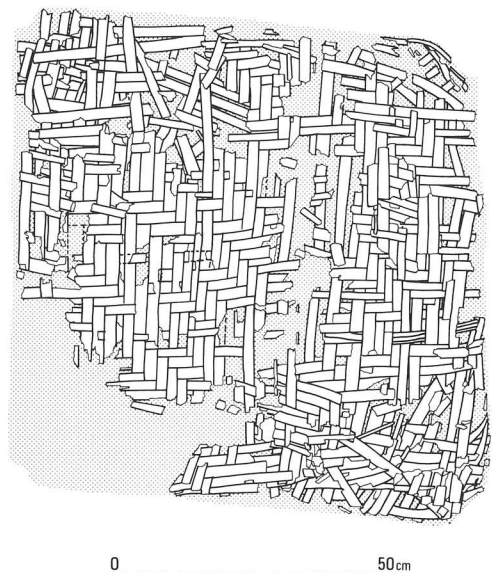


fig.18 網代実測図

む。井戸掘形内からは、北辺を除く三辺の最下段桝板外側でヒノキの細棒が1点ずつ、計3点出土した。このうち、東辺の細棒は横になった状態で桝板に密着して、また西辺の細棒は下端を桝板の下に挟み、立った状態で出土した。井戸掘形内からの細棒の出土は、平城京左京四条二坊一坪S E2600に類例があり、井戸開鑿時の祭祀に関連するものと考えられる。^{註1}

SK3255 井戸S E3260の南で検出した不整形の土壌。東西2.6m、南北1.8mをはかる。炭を多く含む暗褐色粘質土の埋土より奈良時代前半から中頃の土器が出土した。

SK3275 (PL.17) 中央調査区の北東部で検出した円形の土壌。東西3.0m、南北3.1m、深さ1.6m。漏斗状で中央が一段深くなる。埋土から奈良時代の土器小片が出土した。

SK3300 (PL.17) 中央調査区の北辺中央で検出した東西に長い土壌。東西約16m、南北約4m、深さ0.2~0.3mをはかる。六坪の遺構のなかでは最も古い段階に属し、掘立柱建物S B3270・3280、溝S D3310、土壌SK3275はいずれもSK3300の埋土を切っている。出土遺物には、瓦・土器・漆器・砥石がある、なかでも多量に出土した土器は、鳥形硯や計5点の墨書土器を含み、奈良時代前半から中頃(平城宮Ⅱ~Ⅲ)に比定できる。

SX3178 中央調査区の東半部南辺、掘立柱建物S B3185の北東約1.8mの位置で検出したほぼ円形の土壌。底部を打ち欠いた須恵器甕を埋め込む。土壌の径約0.5m、深さ約0.2m。

註1 奈良国立文化財研究所『平城京左京四条二坊一坪発掘調査報告』1984

3 中世の遺構

中世の遺構には河川1条がある。他に中世末から近世の井戸・土壌・墓がいくつかある。

SD3340 (PL.19) 中央調査区のやや西寄り、ほぼ三坪と六坪との坪境小路上を北から南に流れる河川。完掘したのは南端部で、今回検出した部分の約4分の1の面積にあたる。最大幅約22m、深さ約2.8m。堆積土は3層に大別できる(fig.19)。最下層は褐色砂礫層で、中世の羽釜・陶器の破片を出土。西岸の川底では当初の護岸施設と思われる長さ約5.6m、直径約35cmの丸太材を検出した。第2層は灰褐色砂層を主とした互層で、その最上層の暗青灰色シルト層から室町時代とみられる木製板卒塔婆1点が出土。第3層は褐色砂層と暗灰色粘質土層の互層で、遺物はなかった。第1・2層はともに砂礫層で、出土した羽釜・陶器の破片も厳密な時代判定が困難なほどに磨滅しており、流れの相当速い川であったことを示す。第3層の時期には深さも浅く幅も狭くなり、西北から東南へやや斜めに流れていた。

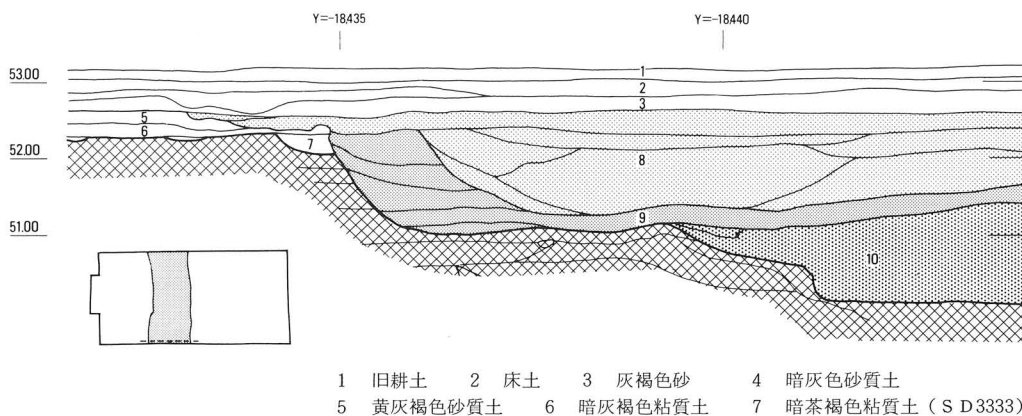


fig.19 SD3340土層図 1:100

なお、当研究所では第156—2次調査で、今回の調査区より南方の左京九条一坊三・六坪を発掘調査したが、S D3340の下流に相当すると思われる流路等を検出していない。

SE3451 中央調査区西辺の池状遺構S G3500上で検出した井戸。掘形は東西約2.5m、南北約2.9mの不整形円で、井戸枠はなく素掘りである。埋土からは桶1点、近世の陶器片が数点出土した。



fig.20 S E3345 西から

SE3345 (fig.20) S D3340上で検出した井戸。掘形は一辺約2.4mの隅丸方形で、深さ1mまで確認。井戸枠は一辺約1.2mの正方形で、縦板を内側から横棧によって支え、横棧は相欠きの柄で組む。



fig.21 S E3229 南から

SE3202 中央調査区東南部で検出した素掘りの井戸。掘形は東西約2.0m、南北約1.7mの隅丸方形で、S K3208の掘形を切っている。

SE3229 (fig.21) 中央調査区の東辺で検出した井戸。掘形は直径約1.1mの円形で、深さは1mまで確認した。井戸枠は直径約70cmの円形で、縦板組みである。埋土からは近世の陶器片が出土した。

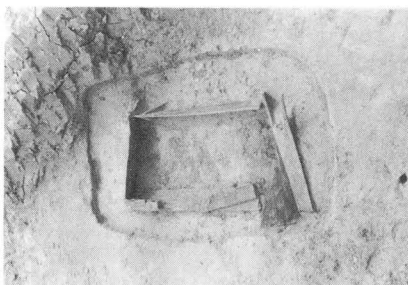
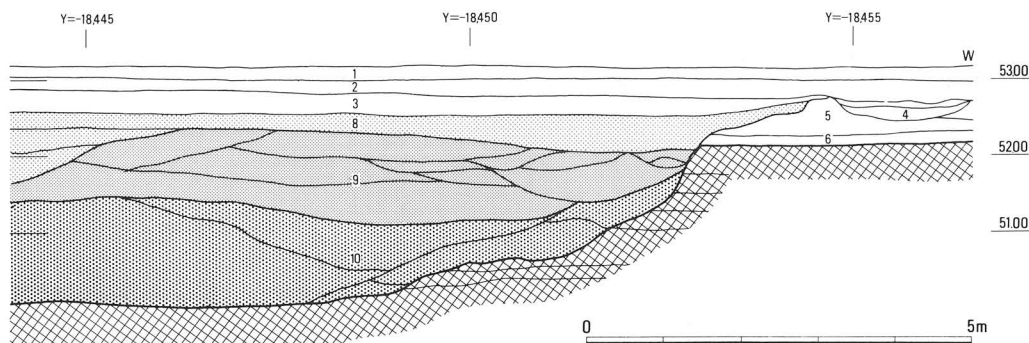


fig.22 S X3453 東から

SK3201 中央調査区東南部で検出した隅丸方形の土壇。掘形西辺はSE3202の掘形によって切られている。現状では東西約1.5m、南北約1.2m、深さ約20cmである。埋土からは下駄の歯1点、木槌の頭部1点、杉の薄板1点出土した。

SX3453 (fig.22) 中央調査区のS D3340堆積土上で検出した木棺墓。掘形は東西約0.7m、南北約1.2mの隅丸長方形。木棺は組み合わせ式箱形木棺で、長さ75cm、幅50cm。材はヒノキ。



8 褐色砂と暗灰色粘質土の互層 9 灰褐色砂と灰白色砂礫の互層 10 褐色砂礫

4 古墳時代の遺構 (fig.24、PL.4・5、巻末折込)

概観 (fig.23) 中央調査区のほぼ全域にわたって、奈良時代の遺構と同一の地山面で古墳時代の遺構を検出した。ただし、中央調査区の南西部では、古墳時代の遺構は奈良時代の遺構面である暗茶褐色粘質土層の下から検出した。検出した主な遺構には、竪穴住居跡3棟、掘立柱建物35棟以上、塀6条、溝10条、土壇8基、河川1条および堰1基がある。これらの遺構は古墳時代中期末から後期にかけての集落の一部を構成する。遺構の全般的な分布は、建物が河川SD3400の両岸に密集し、それから東へ密度が稀薄になる。溝SD3222以東には遺構が検出されなかったため、この溝は集落の東北を限る施設であった可能性がある。また、集落の北、南および西の限界は調査区の制約があって明らかにできなかった。

建物・塀 (fig.24、tab.2) 竪穴住居、掘立柱建物および塀については概要を表 (tab.2) にまとめたので、個別遺構の記述は省略する。以下では、まず建物に関する概要を述べ、次に主要な建物に限って解説を行う。

掘立柱建物の構造については、桁行と梁間が1間×1間、2間×1間、2間×2間、3間×2間の4種類が確認できた。各々の棟数は1間×1間から順に、6棟、3棟、3棟、3棟を数える。一見、1間×1間の小規模な建物が多くみえるが、調査区外へ延びるために構造を確認できない建物が20棟と多く、しかもそのほとんどは梁間2間の構造と推定される。したがって、実際には梁間2間で桁行が2間ないし3間の建物がこの集落の主体を占めていたのであろう。また、床束をもつ掘立柱建物は2棟を検出しえた。

次に、主要な建物・塀について解説する。

SB3440 (PL.20) 河川SD3400東岸で検出した桁行2間、梁間2間の床束をもつ掘立柱建物。柱間は桁行・梁間とも1.7m等間である。柱掘形は一边0.5~0.6mの隅丸方形で、西北隅と東側柱列には径25~35cmの柱痕跡が残る。床束の掘形は辺約0.4mと小さい。竪穴住居SB3430と重複するが切り合いはない。また、北側柱列の掘形は溝SD3449を切って掘られている。

SB3450 (PL.20) SB3440の東北に1.9m隔てて並ぶ桁行2間、梁間2間の床束をもつ掘立柱建物。柱間は桁行1.8m等間、梁間1.6m等間。柱掘形は一边0.5~0.8mの隅丸方形であり、東南隅とすべて西側柱の柱掘形に径25~30cmの柱痕跡が残る。床束の掘形は径約0.3mと小さい。

SB3460 (PL.20) SB3450の東北に1.8mを隔てて並ぶ桁行2間、梁間2間の掘立柱建物。SB3440・3450と同じく床束をもつ建物の可能性がある。柱間は桁行が1.9m等間、梁間が1.7m等間である。柱掘形は一边0.5~0.7mの方形ないし隅丸方形で、溝SD3433・3456を

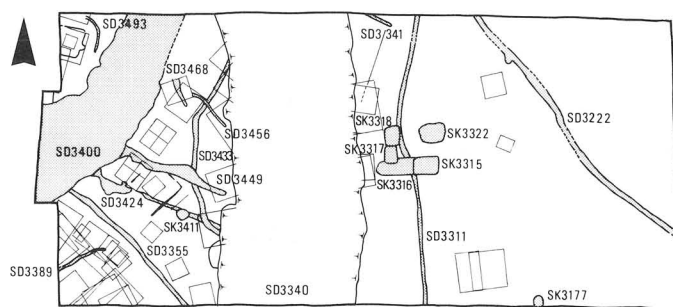


fig.23 古墳時代遺構概略図

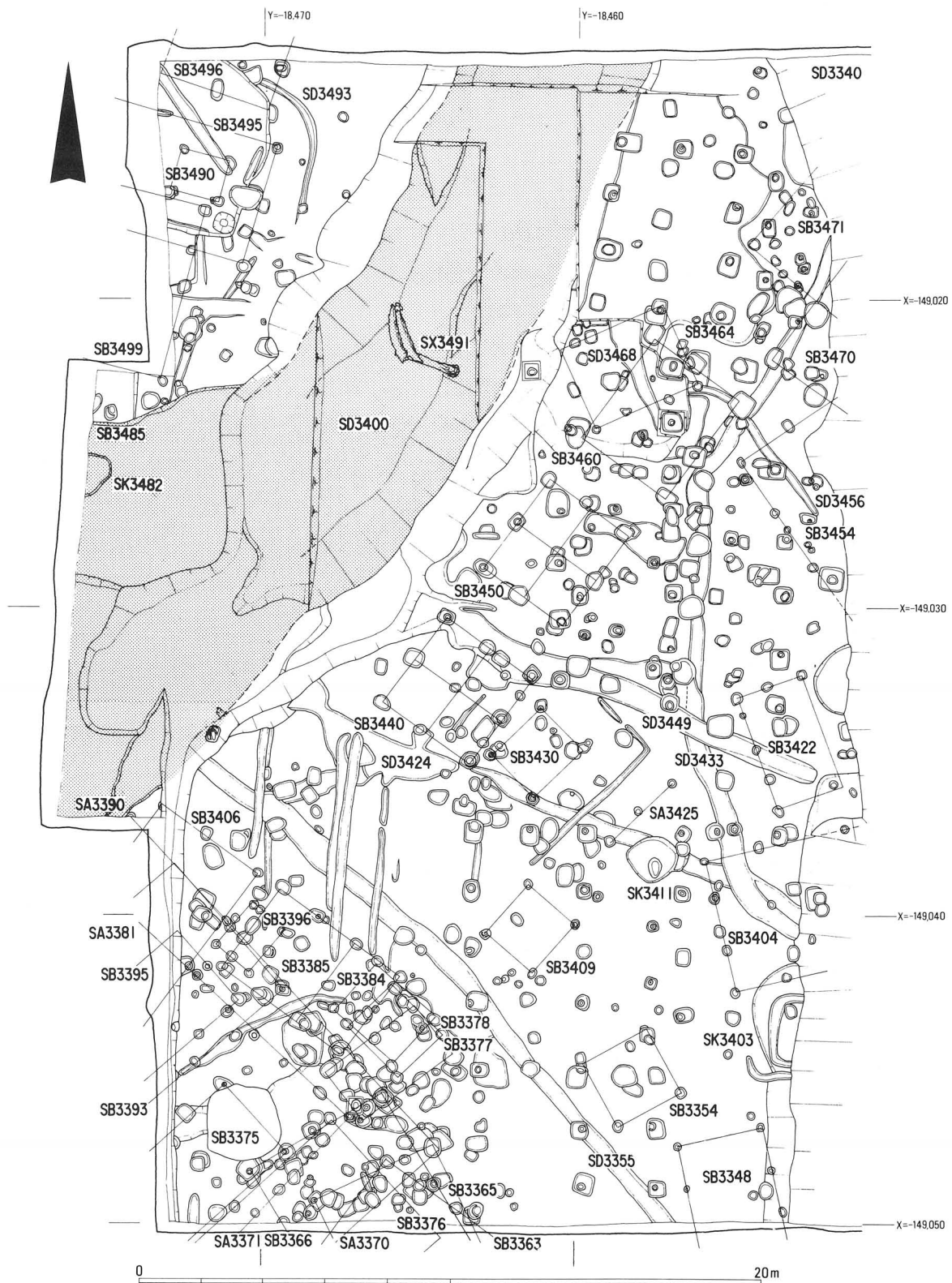


fig.24 古墳時代遺構図（中央調査区西半）1：200

切って掘られている。

以上の3棟は同一構造をもち、西側柱列を揃えてほぼ等間隔に並ぶ。さらに、S B3440とS B3460とは梁間をも等しくし、東側柱列も揃えており、規格性が高い。

S B3406 中央調査区の南西隅で検出した桁行2間以上、梁間2間の掘立柱建物。主軸方向をN36° Eとし、東側柱筋をS B3440・3450・3460の西側柱筋と、また北妻柱筋をS B3385の北側柱筋と揃える。柱間は桁行・梁間とも1.9m等間である。

S B3385 (PL.20) S B3406の東に近接して建つ桁行3間、梁間2間の掘立柱建物。東1間目に間仕切の柱穴をもつ。北側柱筋はS B3406の北妻柱筋に揃う。規模は桁行総長4.8m、梁間3.2mで、柱間は桁行・梁間ともに1.6m等間である。

S A3371・3381 中央調査区の南西隅で検出したL字形の塀。S A3381は方位がN47° Wで5間分を、これと直交するS A3371は3間分を検出した。柱間は1.0~1.6mと一定しない。

S A3370・3390 S A3371・3381の一まわり外側にあるL字形の塀。S A3390は方位がN43° Wで8間分を、S A3370は1間分を検出した。柱間は1.8m等間である。

S B3430 (PL.21) 河川S D3400東岸で検出した方形の竪穴住居。柱穴と、南辺を除く3辺の周壁溝(幅0.2m)を確認した。削平が著しく、周壁と竈は検出できなかった。規模は東西が5.1m、南北が推定5.5mであり、柱間は東西が2.2m、南北が1.9mをはかる。柱掘形は一边0.4~0.5mの隅丸方形を呈し、東北隅を除く3個所に径20cmの柱痕跡を残す。遺物は出土していないが、切り合い関係から溝S D3424より新しいことがわかる。なお、東辺に平行する塀S A3425は、この竪穴住居に伴う可能性が高く、S A3425の東にある土壌S K3411もS B

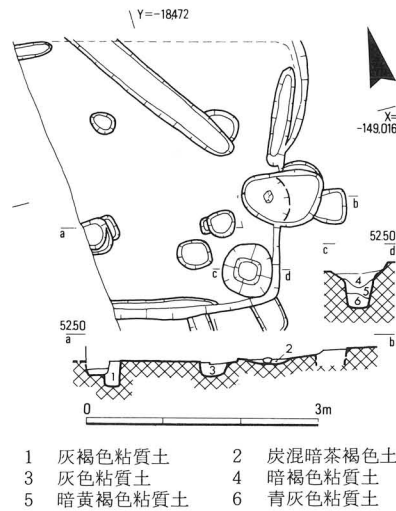


fig.25 S B3490平面・断面図

遺構番号	規模	棟方向	柱間(m)		備考	遺構番号	規模	棟方向	柱間(m)		備考
			桁行	梁間					桁行	梁間	
S B3206	3×2	N 8°W	1.5	2.5		S B3395	1+×1+	N47°E	1.7	1.4	
S B3207	2×1	N10°W	2.5	2.7		S B3396	2×1	N39°E	0.9	1.4	
S B3266	1×1	N21°W	1.8	1.6		S B3404	3×1+	N15°W	1.4	1.8	S E3348と側柱筋揃う
S B3285	1×1	N11°W	3.0	3.0		S B3406	2+×2	N36°E	1.9	1.9	S B3393より新
S B3313	?×2	N12°W	?	2.0		S B3409	1×1	N41°E	2.1	2.0	
S B3314	?×2	N 6°W	?	1.7		S B3422	2+×2	N20°W	1.9	1.0	
S B3329	2×1+	N12°W	3.2	2.5		S B3440	2×2	N36°E	1.7	1.7	総柱
S B3331	1+×2	N12°W	1.8	1.8	S A3347より新	S B3450	2×2	N36°E	1.8	1.6	総柱
S B3348	2+×1	N15°W	1.4	2.8	S B3404と側柱筋揃う	S B3454	2+×1+	N39°W	2.1	1.9	
S B3354	1×1	N29°W	2.4	2.4		S B3460	2×2	N36°E	2.0	1.7	S B3440・3460と西側柱筋揃う
S B3363	2+×1+	N54°W	1.4	2.2		S B3464	3×2	N66°E	1.2	1.4	
S B3365	1+×2	N26°W	2.7	2.1	S A3390より新	S B3470	1+×1+	N54°W	1.8	2.0	S B3460と柱筋揃う
S B3366	2+×2	N31°W	1.7	2.5	S B3375・S A3390より新	S B3495	1+×2	N74°W	1.8	1.5	S B3490より古
S B3375	2+×2	N47°E	1.5	1.5	S B3366より新	S B3496	1+×1+	N17°E	1.8	1.4	
S B3376	2+×1+	N45°E	2.1	2.6		S B3499	2×1+	N14°E	2.6	1.3	S B3490より新
S B3377	2×1	N51°E	1.8	2.0		S A3347	4+	N 8°E	1.4~2.5		S D3341とほぼ直交
S B3378	1×1	N45°E	2.2	2.0		S A3370	1+	N47°E	1.5		S A3390と直交
S B3384	1×1	N41°E	2.8	2.0		S A3371	3+	N43°E	1.0~1.6		S A3381と直交
S B3385	3×2	N54°W	1.6	1.6	間仕切あり S A3390より新	S A3381	5+	N47°W	1.2~1.5		S A3371と直交
S B3393	2+×1+	N45°E	2.2	2.7	S B3406より古 S A3390より新	S A3390	8	N43°W	1.8~2.0		S A3370と直交
						S A3425	2	N45°E	1.4		

tab.2 古墳時代掘立柱建物・塀一覧表

3430に関連するものとみられる。

S B3490 (fig.25、PL.21) 河川S D3400西岸で検出した方形の竪穴住居。東辺に竈を、東南隅には貯蔵穴を備え、これらの周辺を除く各辺に周壁溝がめぐる。西辺は調査区外にあり、北辺は奈良時代の土壌によって削平されている。S B3490の規模は、東西3.5m以上、南北3.7m、深さ0.3mある。竈は0.9×0.7mの浅い楕円形で、東辺から0.4m張り出す。壁体は遺存しなかったが、竈埋土から粘土塊を少量検出した。竈中央には焼けて赤変した石があり、支脚として使用したとみられる。貯蔵穴は、一辺0.7mの隅丸方形の平面形をもち、深さ0.5mある。出土遺物には、6世紀前半の土師器甕・高杯、須恵器蓋杯がある。竈埋土と、貯蔵穴脇の床面から出土した。S B3490は掘立柱建物S B3499・3495と重複しており、S B3495より新しく、S B3499より古いことがわかる。L字溝S D3493は、S B3490の北辺および東辺の外側約1.5mを平行して走ることから、この竪穴住居に伴う溝であった可能性が高い。

なお、S B3430の東南で検出したS B3402は、周壁溝と思われるものが残るが、規模が南北約2.2mときわめて小さく竪穴住居か否か明らかでない。

河川 S D3400 (fig.26、PL.22) 中央調査区の西北部で検出した古墳時代の河川。北東から南西へ流れ、調査区内で西に振る。奈良時代の池状遺構S G3500の下層にあり、中央部の約2分の1を発掘した。上面の幅7.0~10.0m、底面の幅約3.0m、深さ約2.5mをはかる。堆積層は大きく、主に黒灰色粘質土層からなる上層(厚さ約1.0m)と、灰色粗砂および暗灰色砂質土を主とする下層(厚さ約1.4m)との2層に区分できる。下層はこの河川がかなりの流量で流れていたことを、上層は粘質土層からなるので、流量の減少によって形成された層であることを示す。下層に伴う遺構として自然木3本を並べた堰S X3491がある。1本を流れに直交して置き、一端は左岸に埋めこんで、他端は別の2本の木を両側に置いて固定している。なお、上・下層とも護岸の施設は認められなかった。

S D3400からは、土器・木器・石器が出土した。S X3491ののる最下層の灰色粗砂層は布留式期から6世紀後半の土器を出土しており、河川は古墳時代集落と共存して機能していたことがわかる。上層は6世紀代の土器の他に少量ながら7世紀末頃の土器を含み、集落の廃絶後徐々に河川が埋没していったことを示す。この他、種子・骨が出土している。種子は主に下層からの出土で、カヤ・ムクロジ・エゴノキ・スモモがある。骨はウマの脛骨1点である。

溝 S D3355 (fig.27) 中央調査区西南部で検出した北西から東南に走る断面V字形の素掘り溝。幅0.5~0.8m、深さ0.3m。約21mを確認し、西端はS D3400に取り付くが、東は調査区外にのびる。S B3385・3440とはほぼ方向を揃えているので、後述する古墳時代集落のⅡ・Ⅲ期において2つの建物群を区画した溝とみられる。埋土から6世紀前半の土器が出土した。

S D3424 S D3355の北にあり、西北西から東南東に走る素掘り溝。溝幅は最大1.1mあるが、

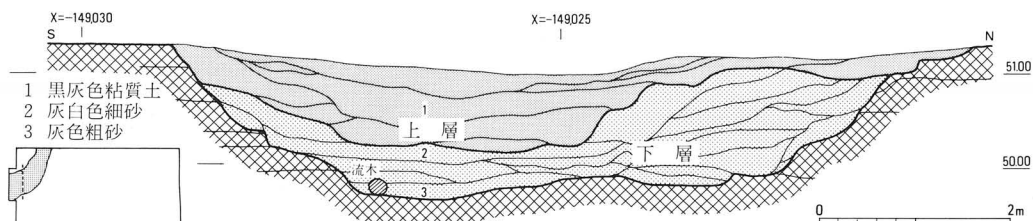


fig.26 S D3400土層図 1 : 100

浅いため一部途切れる。また、西端近くでは二又に別れる。S B3404・3430・3440、S A3425、S D3433、S K3411に切られている。少量の土器片が出土した。

SD3449 S D3424の北約4 mにあって、これとほぼ平行する素掘り溝。幅0.6~1.0 m、深さ0.3 m。底は平坦である。S D3433より新しくS B3440・3422より古い。土師器小片が出土。

SD3433 (fig.27) S D3400の東辺を、弧状に彎曲しながらほぼ南北に走る素掘りの溝。断面V字形で、幅0.4~0.8 m、深さ0.3 m。S D3424より新しく、S D3449・3456より古い。

SD3311 (PL.22) 中央調査区の東半部西よりを南北に走る断面U字形の素掘り溝。南半が西へ、北半が東へ振れる。幅0.3~0.7 m、幅0.2~0.3 m。検出総延長33 mをはかり、南北とも調査区外へ延びる。5世紀末頃の須恵器・土師器のほか、滑石製の紡錘車が出土した。

SD3341 中央調査区の東半部西北隅で検出した素掘りの斜行溝。S A3347とほぼ直交する。西端をS D3333に切られている。幅約0.4 m。6世紀前半の須恵器・土師器を出土した。

SD3222 (fig.27, PL.22) 中央調査区の東半部東寄りを北西から南東に走る素掘りの溝。断面V字形で、幅0.5~0.9 m、深さ0.4~0.6 mをはかる。総長約40 mを検出したが、さらに調査区外へ延びる。6世紀前半の土師器と少量の須恵器を出土した。

土壌 SK3411 中央調査区西半部で検出した不整楕円形の土壌。溝S D3424を切って掘られている。東西1.7 m、南北1 m、深さ0.7 mをはかる。6世紀代の須恵器・土師器が出土した。

SK3482 中央調査区西端、河川S D3400の埋土上面で検出した土壌。西半が調査区外に延びるため、東西径については不明だが、南北は1.4 mある。7世紀末頃の土師器を出土した。

SK3315 中央調査区東半部の西辺中央でS D3311と重複する4基の土壌を検出した。S K3315は東端に位置する長方形の土壌。東西3.0 m、南北2.1 m、深さ0.2 mの浅い皿状を呈する。切り合い関係からS D3311、S K3316より新しい。6世紀後半の須恵器・土師器を出土した。

SK3316 S K3315に西接する東西に長い長方形の土壌。東西4 m以上、南北2 mをはかる。切り合い関係からS K3315・3317より古い。6世紀代の須恵器・土師器が出土した。

SK3317 S K3316の北にある隅丸長方形の土壌。東西1.5 m、南北1.8 m、深さ0.3 m。切り合い関係からS K3315より古く、S K3318より新しい。6世紀代の須恵器・土師器を出土。

SK3318 S K3317の北に接し、これを切る長方形の土壌。東西1.8 m、南北2.2 m、深さ0.2 mをはかる。6世紀代の須恵器・土師器が出土した。

SK3322 S K3322の東にある。東西2.9 m、南北2.3 mの不整な隅丸長方形の土壌。深さ0.2 mで底はほぼ平坦である。5世紀末頃の土器が出土した。

SK3177 (fig.28) 中央調査区の東半部南辺で検出した、古墳時代初頭の不整円形土壌。東西1.4 m、南北1.3 m、深さ0.7 m。埋土は4層にわかれ、第3層から完形の甕が出土した。

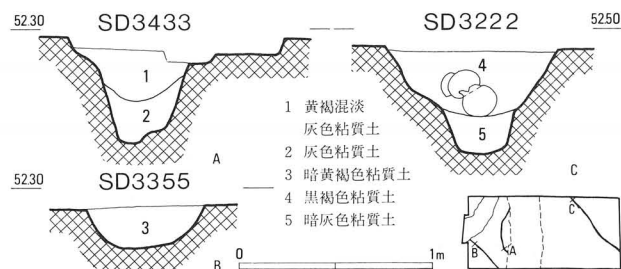


fig.27 古墳時代溝土層図



fig.28 S K3177 北から

小結 掘立柱建物の集落を分析する基礎的作業として、建物方向の同一性に基^{註1}づいて同時に存在した建物群を抽出する方法が一般的である。今回検出した集落には側柱筋を揃えて建つ建物群が何組か存在し、建物方向は建物の同時性と計画性を表現するとみてよい。以下ではこの分析方法によって抽出した建物群を、建物相互の切り合い関係から4期に編年する (fig.29)。

I期 掘立柱建物S B3384・3396・3471・3495・3496、塀S A3371・3381、溝S D3311・3449・3456、土壇S K3322がこの時期にあたる。なお、河川S D3400はI期からIV期まで存続し、その後7世紀末頃までの間にほとんど埋没してしまう。N40°E前後の方向をとるI期の建物・塀はS D3400の両岸に集中し、集落の東はS D3311が画していたと考えられる。

S D3400東岸には約25m幅の空地で隔てられた2つの建物群が認められる。中央調査区南西隅の建物群(A₁群)は直角に交わる2条の塀で区画され、塀の北外側に2棟の建物を伴う。塀の内側には中心的な建物があったと考えられるが、調査区内では相当建物を確認できなかった。S D3400東岸のもう一方の建物群(B群)と、西岸の建物群(C₁群)は、各々1棟ずつを検出したにとどまるので、群構成は明らかでない。C₁群のS B3495は東岸の建物とは方向を異にする。西岸の建物は続くII・III期もほぼ同一方向をとり、東岸の建物方向と揃わない。

II期 竪穴住居S B3430・3485・3490、掘立柱建物S B3375・3376・3378・3393・3395、塀S A3370・3390・3425、溝S D3222・3311・3355、土壇S K3411がII期の遺構である。

II期の建物群はS D3400の東岸に2群(A₂群・D₁群)と右岸に1群(C₂群)ある。N45°Eの方向をとる。東岸の建物群のうち、A₂群は建物の重複から2小期に区分される。即ち、S B3375・3395、S A3370・3390からなるII a期と、S B3376・3378・3393、S D3355からなるII b期である。II a期のA₂群は、L字形の塀で区画しており、I期のA₁群の構成を、規模を拡大して踏襲する。次のII b期には、塀が廃され、建物群の北を溝S D3355で区画する。建物群は東へ拡張され、II a期のS B3375・3395は各々S B3376・3393へと規模を拡大して建て替えられる。

以上、A₂群はII a期・II b期に区分できるが、C₂群とD₁群は建物が少なく時期細分できない。むしろ、この2群は竪穴住居で構成されることに特徴がある。C₂群の他の建物は明らかでないが、大阪府百舌鳥陵南遺跡^{註2}のように、竪穴住居と掘立柱建物が混在する群構成であろう。竪穴住居1棟だけのD₁群はI期の空地に占地し、I期の群配置を改変する形で出現している。A群とD群の群配置が次のIII期へ続くこととあわせ、D₁群の時期はII b期と考える。I期に集落の東を画していたS D3311に代わって、S D3222が掘られるのもII b期であろう。

III期 掘立柱建物S B3363・3385・3406・3409・3440・3450・3460・3470・3496・3499、塀S A3347、溝S D3341・3355がIII期の遺構である。建物群はS D3400東岸に、S D3355より南のA₃群と北のD₂群、S D3400西岸にC₃群の、計3群がある。これはII b期の集落構成と同じである。A₃群とD₂群の建物は主軸方向がほぼN36°Eである。

A₃群のコ字形にならぶ建物3棟のうち、S B3406とS B3385は北妻柱筋と北側柱筋が揃う。ただ、極めて近接して建つので、同時には存在しなかった可能性がある。A₃群の北はS D3355が画す。D₂群はこの集落で最も代表的な建物群である。S B3440・3450・3460は西側柱筋を揃えて並ぶ倉庫風建物であり、S B3460の北東にあるS B3470も、西の柱筋をS B3460の東側柱筋と揃えて建つ。従ってD₂群の4棟の建物はL字形に並び、配置・規模に高い計画性

が窺える。また、S A3347とS D3341をD₂群の北東の境界とみると、この群の占める領域は東西約25m、南北約40mあり、面積にして約1000㎡の広さをもつ。兵庫県松野遺跡^{註3}や大阪府大園遺跡集落A^{註4}には及ばないが、大園遺跡集落E^{註5}にはほぼ同規模の領域をもつ建物群がある。

IV期 掘立柱建物S B3206・3207・3266・3285・3311・3313・3314・3329・3331・3348・3354・3365・3366・3377・3404・3422・3454・3464、土壇S K3315～3318がIV期の遺構である。IV期の建物の特徴は、I～III期の建物方向とは逆に主軸が北で西に振ることである。IV期の建物を方向と位置関係から、A₄群—S B3354・3366、D₃群—S B3314・3331・3422・3454・3464、E群—その他11棟に分類する。これら3群の建物には先後関係を決定できるものがないが、A₄群とD₃群がIII期の建物配置を受け継ぐのに比べ、E群は調査区の中央に散漫な分布を示し、III期以前とは全く異なる。従って、III期との比較から、A₄群とC₃群をIV a期に、E群をIV b期に編年する。A₄群の2棟の建物は溝S D3355をはさんで群を形成するので、II b・III期に区画施設であったこの溝は、IV a期には機能していないとみられる。他方、E群はS D3222を超えて東へはひろがらないから、S D3222は境界としてIV b期まで残る可能性がある。

以上、古墳時代の遺構をI～IV期に編年した。各建物群(A～E群)の消長をたどると、A群—I～IV a期、B群—I期、C群—I～III期、D群—II b～IV a期、E群—IV b期となり、A・C・D群は数期にわたり同じ場所で建て替えを行っていることがわかる。次に、各期の年代を比定しておく。まず、I期のS D3311とS K3322からは5世紀末頃の土器、II期のS B3393・3490、II b期に掘削されるS D3222・3355及びIII期のS D3341からは6世紀前半の土器、さらにIV期のS K3316からは6世紀後半の土器が出土している。従って、I期は5世紀末頃、II・III期は6世紀前半、IV期は6世紀後半に年代比定できる。S D3400や包含層から出土した遺物に7世紀のものがごく少なく、しかも末頃のものに限られるから、IV期は7世紀に下らない。

最後に、III期のD₂群について付言しておく。D₂群の倉庫風建物は、各々の面積は一般的な規模であるが、3棟が柱筋を揃えて並ぶ特徴をもつ。同様の例は、藤原宮跡東方官衙下層^{註6}と大園遺跡にある。前者は溝と塀で区画された中にL字形に並ぶ5棟の倉のうち4棟が柱筋を揃える。後者の集落Aでは、南北に並ぶ2棟の倉と1棟の屋が東側柱筋を揃え、また集落Eでも2棟の倉と1棟の屋が北東—南西方向に柱筋を揃え、近接して建つ。集落Aでは3棟が大型住居の前面に直交して配置され、集落Eでは大型住居と平行して配置されている。3例とも片側の柱筋だけが揃い、個々の建物の柱間には厳密な統一がない。各々の年代は藤原宮下層例が5世紀末頃、大園例の集落Aが5世紀後半、集落Eが6世紀末頃である。大園遺跡の2例は、D₂群と同軌の倉庫群が、規模や区画の存在から集落内でも有力な建物群に限って存在することを示している。D₂群についても、同様の性格を想定することは許されるであろう。

註1 小笠原好彦「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』25—4 1979、丹羽佑一「大園遺跡における古墳時代中期後半の建物群の構成」『奈良大学紀要』10 1981

註2 大阪府教委『百舌鳥陵南遺跡発掘調査概要』（『大阪府文化財調査概要 1974—13』）1975

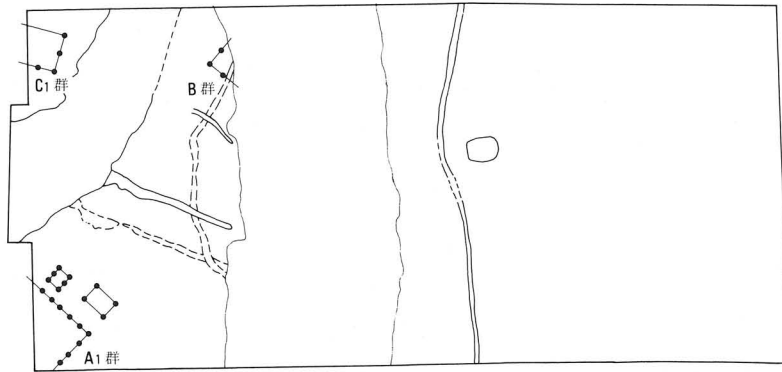
註3 神戸市教委『松野遺跡発掘調査概報』1983

註4 大阪府教委『大園遺跡発掘調査概要 III』（『大阪府文化財調査概要 1975』）1976、集落A・Eの呼称は次の文献による。広瀬和雄「大園遺跡における集落の展開」（大阪府教委『大園遺跡発掘調査概要・VII 府道松原・泉大津線建設に伴う調査』）1982

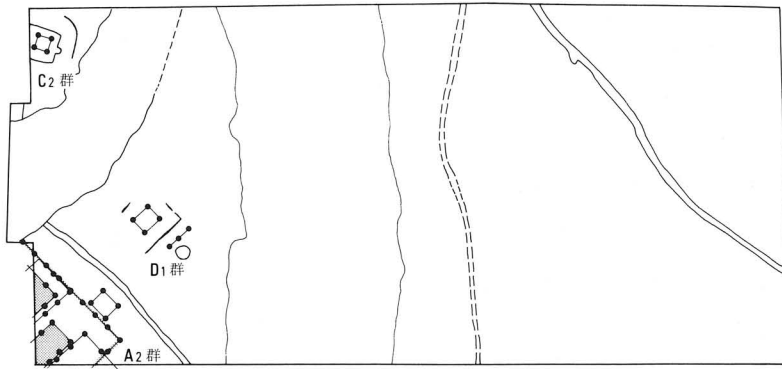
註5 大園遺跡調査会『大園遺跡発掘調査概報 2』1976

註6 1984年から1985年にかけて行われた藤原宮跡第44次調査。

I 期

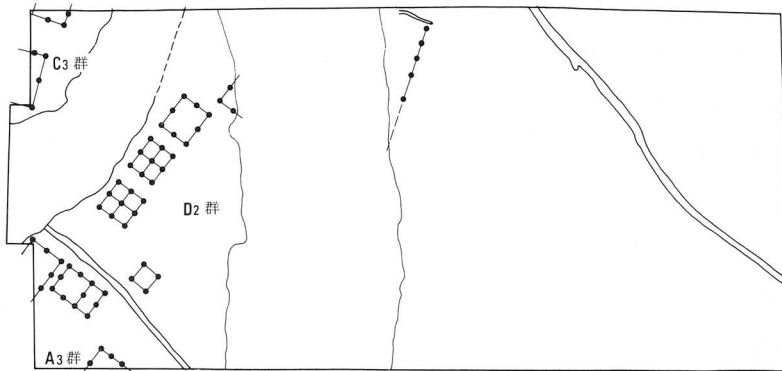


II 期

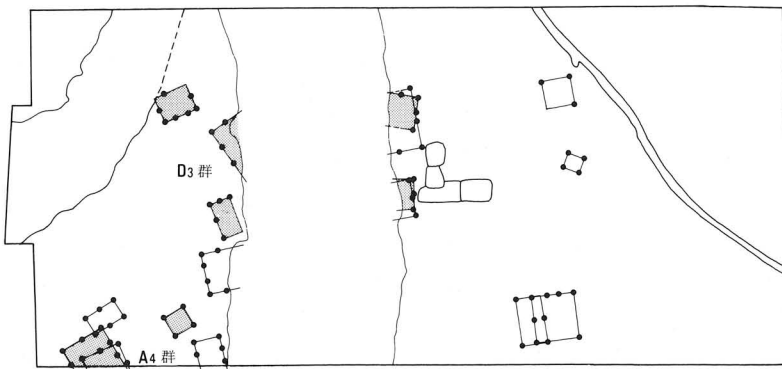


A2群の細分
 ■ II a 期
 □ II b 期

III 期



IV 期



■ IV a 期
 (A4・D3群)
 □ IV b 期

0 40m

fig.29 古墳時代遺構変遷図 1 : 800